

作物の用意

泉鏡花作

明治四十三年十一月

私が作物に對する用意といふのは理窟はない、只
好いものを書きたいといふ事のみです。されば現代
の風潮はどうあらうと其麼事には構はず私は私の好
きなものゝ、胸中に浮んだものを書くばかりです。
人間には誰にでも好き嫌ひがあつて自分が嫌ひなも
のでも文壇の風潮だと云つて無理に書いたものは、
何等の興味が無くつて丁度毛脛に緋縮緬が搦んだ様
なものですから、私は何等の流行を追はず好いたも
りを書かうと思つて居ます、否書いて居るのです。
例へば茲に一人の人物を描くにしたところが其性格
は第二、第一其人にならなければ不可ぬと思ふと同
時にまた一方には描かうと思ふ人物を幻影の中に私
の眼前に現はして、筆にする、其人物が假にお梅さ
んといふ若い女とすれば、そのお梅さんに饒舌つて
貰ひ、立つて貰ひ、坐つて貰つて而して夫を筆に現
はすと、私が日頃みて居る以上によく書けると思ふ。

であるから、作者其物が如何に辯舌が不得手でも其處に雄辯家を書かうと思ふなら、其様な人を眼中に描いて而して饒舌らすると、自然其書いたものに流暢なる雄辯家が現れる、繼母と繼子と對話さすにした處が同じで如何に作者に其麼經驗が無くともお前は繼母だからドン／＼云ひたい事は言つて呉れといふやうなものを胸中に描いて而して筆にするのです、斯うなれば陸軍の知識が無い作者でも其處に堂々たる軍人を躍如させる事も出来、外國語の出来ない人でも外國語の出来る人を現す事が出来、また盗坊にしたところが其眞物に劣らないものを書く事が出来ると思ひます。夫から小説の如きものは自分が一人見て楽しんだり喜んだりするものではない、多くの人に読ませるものであるから如何に自然を其儘に寫すと言つても相當のお化粧もし且禮儀が無ければならぬ。芝居の立廻はりにしたところが其目的は「投げられた、投げる」といふにあるのだから如何に寫實を觀せるとした處で投げられても觀客の方に向つて禪を見せなくつてもよしい、投げられる時にバツクの方へ向うて轉べば可いのである。作物も是れと同じで、假りに此處十日以上も病床に悩ん

で窺れ果てた女を描くとしても前に申した通り人に
讀ませ且見せるものであるから一應お湯をつかはせ
て病床に寝かせて置きたい、如何にお湯をつかはせ
ても病人は病人である、それから美人とは書くものゝ
其起居振舞に際し妙な厭に匂がする様なものを描い
て満足してゐる人がある。這麼事は作者として餘程
注意せなければならぬと思ふ。夫から今度は時刻と
場所の關係だ、室内に二人の人物が居て實にしめや
かな話しをして居るのにも拘らず室外は豪雨が降つ
て夫に風さへ混じる外面の景色を書いては釣合が取
れない、外で暴風雨がして居るのなら、其様に内に
居る人物にも外面に適合した様な話をさせ、且つ行
爲を演ぜさせねばならぬ。而して私等は、人の作に
對して最初から批評的に讀む事を好まない。である
から作者の方でも、最初は何等批評をさせず面白く
讀む、一度二度讀で能く噛しめさせて而して後批評
するなら批評させる様な作物を書かなくては不可な
いと思ふ。・・・また其麼作物でければ決して
面白いものではない、近頃見る或る作物の様に、最
初から批評的に讀んで呉れ、と言つか様な小説は讀
んで決して興味を持つものではない。(談。)